

- 4 { しょう 笙 行円作 1管 [有形文化財（工芸品）]
しょう 笙 頼尊作 1管

附 寄進状ほか9点

[所在地] 桜井市多武峰319番地

[所有者] たんざんじんじゃ
談山神社

[法量] 行円作 総高55.2cm／頼尊作 総高47.7cm

[時代] 鎌倉時代（行円作 天福元年／1233）

[概要]

談山神社に伝わる2管の笙。長短17本の竹管を木製漆塗りの匏^{ほう}に挿し込み、竹管の中程を銀製の帯金具で締める。両管とも、吹口からみて反対側の几管と呼ばれる竹管内側の針書銘中に信貴山僧の名が記され、一管は行円、一管は頼尊が作者であることがわかる。行円作の笙は、竹管の中程に通常は一条巡らされる銀製の帯金具が二条に表される点を特色とする。附属する江戸時代の添状は本品を「二帯笙^{ふたつおびのしょう}」と記し、天覧に供された優れた名器で山内からの持ち出しを制限することを記す。包裂^{つつみぎれ}や錦袋^{にしきぶくろ}とともに三重箱に収めることも、本品がとりわけ珍重されてきた歴史を示す。



頼尊作の笙は、彦根藩主井伊直亮^{い い なおあき}の収集品の一つである小信貴^{こしんぎ}（彦根城博物館所蔵）と呼ばれる笙と同銘であることから、文永2年（1265）頃の製作とみられる。元禄14年（1701）の銘をもつ附属の緋包裂^{ひのつつみぎれ}に墨書される「大阿闍梨弁英^{だいあじりべんえい}」の名は談山神社文書中に見出せ、当時すでに本品が多武峰に伝来していたことが確認できる。

両管とも作者と製作年が明らかな基準作であり、我が国の楽器史上においても高い価値を有するものである。

（左）笙 行円作

（右）笙 頼尊作